

「男色」と「変態性欲」の間

——『悪魔の弟子』と『孤島の鬼』における男性同性愛の表象——

黒 岩 裕 市

はじめに「変態性欲としての同性愛」概念と「男色」概念

いつの時代、どの地域にも同性間のエロティシズムは存在する。しかし、それをどのように解釈するかに関しては大きな違いがある。たとえば、古代ギリシアの「ペデラス

ティ」やニューギニアのザンビア社会の儀礼的な男性間の性行為を同性愛(homosexuality)と同一のセクシュア

リティと括ることは本来不可能である。日本に目を向けて

みると、一九二〇年代に性欲学の領域で確立した「変態性欲としての同性愛」概念が、それ以降、同性間のエロティ

シズムを規定する際の基盤となった。本稿では比較的早い段階でその「変態性欲としての同性愛」概念を取り入れた二つの小説——浜尾四郎(一八九六—一九三五年)の『悪

魔の弟子』(一九二九年)と江戸川乱歩(一八九四—一九六五年)の『孤島の鬼』(一九二九—三〇年)——を取り上げ、それぞれのテクストにおける男性同性愛の表象を分析する。まずは性欲学と「変態性欲としての同性愛」概念を確認しよう。

性欲学は性欲の「正常／異常」の区分を前提として、「異常」と分類した性欲、当時の流行語を用いれば「変態性欲」を専ら扱った。性欲学を触発したのは、一九一〇年代に翻訳された西洋の性科学の文献であるが、その中でも特に大きな影響を与えたのが、ドイツの性科学者クラフト＝エビングの『変態性欲心理』(一八八六年、邦訳一九一三年)である。同書では同性間のエロティシズムは「同性

色情」として、「ザダイスムス」、「マゾヒスムス」、「フェティシスムス」とともに「変態性欲」と一括されており、この枠組みは日本の性欲学者にも受け継がれた。性科学や性欲学は「変態性欲」を周縁化することで、結婚と家庭内の生殖のみを「正しいセクシュアリティ」⁽³⁾と規範化していったのである。なお、「同性色情」だけではなく、一九一〇年代には homosexuality の様々な訳語が考案され、一九二〇年以降、「同性愛」という語に収束していくことになる。⁽⁴⁾そもそも性欲とは性的欲望を個人の内面と結び付ける概念であったため、「同性愛」も内部の「異常」な気質と関連付けられるようになり、行為ではなく、人格やアイデンティティが問題となった。ミシェル・フーコーの言葉を用いれば、性欲学が流行した一九二〇年代に日本でも「同性愛者は一つの種族」⁽⁵⁾になったのだ。「種族」という隠喩が示すように、「変態性欲としての同性愛」概念は「正常／異常」の二項対立に対応する形で、「異性愛／同性愛」の境界線を本質的、固定的に設定し、人々をどちらか一方に割り振ることを意図していたのである。ところで、性欲学者はアカデミズムの中にはなく、本や雑誌を用いて主に一般読者に向けて語った。一九二〇年前後には、彼らが

主幹した雑誌が次々と刊行され、雑誌というメディアの特性を活かして「変態性欲としての同性愛」概念は普及していった。⁽⁶⁾その一方で、性欲学には当初よりいかがわしさが付き纏っていたことも忘れてはならない。『悪魔の弟子』や『孤島の鬼』が発表された一九二〇年代後半になると、「変態性欲」に関する言説は狭義の性欲学の領域を離れ、「エロ・グロ・ナンセンス」や「猟奇趣味」の高まりの中心でますます娯乐的に消費されるようになった。⁽⁷⁾

性欲学の流行とともに「同性愛者」という「種族」が誕生したと言っても、もちろんそれ以前の日本に同性間のエロティシズムが存在しなかったということではない。本稿で論じる男性間のエロティシズムは「男色」という概念によって規定されていた。中世の寺院を起源とし、武士の間の「衆道」を経て、江戸時代に入ると町人にも広まったと言われる「男色」は非常に広い概念であり、売春を専門としていた舞台に出ない歌舞伎役者である「かげま」をも包括する。本稿では「変態性欲としての同性愛」概念との相違点に着目しよう。「色道ふたつ」⁽⁸⁾の低位概念である「男色」は、対概念の「女色」とともに、男性だけを欲望の主体としていた。そして両者の優劣を議論した「野傾論」⁽⁹⁾の

存在が示すように、「男色／女色」は相対的、可変的なものであった。それゆえ原則として「男色」は家父長制を支える異性間の性行為とも両立し、また、家父長制を脅かさない限りにおいて社会的に容認され、讃美されたのである。とりわけ武士の間の「衆道」は、年齢差に基づき、年長の「念者」から年少の「若衆」への「意気地」⁽¹⁰⁾といった価値の伝授を根拠として、「武士道の華」とまで持てはやされた。⁽¹¹⁾さらに「念者」と「若衆」のペアが「念友」と呼ばれたことから明らかであるが、「男色」概念のもとでは、男同士の友情と性愛が可視的に連続していた。一九二〇年代以降、「変態性欲としての同性愛」概念が急速に浸透していくのだが、「男色」概念は完全に消え去ったわけではなく、現実性を失いながらも前者への対抗言説としてしばしば持ち出されるようになった。⁽¹²⁾『悪魔の弟子』や『孤島の鬼』にも「変態性欲としての同性愛」概念だけではなく、「男色」概念が持ち込まれている。予め論点を指摘しておくくと、本稿では両概念の二重性を軸に二つの小説を読解する。それでは師弟関係の描かれ方に注目しつつ、浜尾四郎の『悪魔の弟子』を見ていこう。

『悪魔の弟子』と反転する師弟関係

一九二九年、『彼が殺したか』という短編で探偵小説の牙城であった雑誌『新青年』からデビューした浜尾四郎には「エドワード・カーペンターなどの影響を受けたホモセクシュアリテイの研究者」という面もあり、江戸川乱歩にとっては男性同性愛研究の「師匠」の一人であった。乱歩が古代ギリシアの「同性愛文学史」へと開眼したのも、浜尾から借りたカーペンターの書物がきっかけであったとい⁽¹⁴⁾う。浜尾の作品には男性同性愛と隣接する要素が散在しており、『彼が殺したか』⁽¹⁵⁾でも弁護士「私」は被告人の青年の美しさの虜になる。さて、『悪魔の弟子』は浜尾の二作目に当たり、『新青年』の一九二九年四月号に発表された短編小説である。テキストは、殺人の罪で刑務所に拘束されている島浦英三が語り手(手紙の書き手)となり、『旧友にして嘗ては兄弟より親しかりし』(八四) 仲であった「××地方裁判所検事」の土田八郎に宛てた書簡体小説の形式をとっている。「私」には露子という妻がいるが、愛しているのは石原すえ子という女性であり、露子の存在は厭わしいものではない。そこで「私」は、事故死に見

せかけて、常用している睡眠薬によって妻の殺害を企てる。しかし露子殺害の計画は失敗し、同じ日に偶然、すえ子のほうが睡眠薬を多量に飲み、死んでしまう。彼女の死に絶望した「私」は大量の睡眠薬で自殺を図り、辛うじて一命を取りとめる。そして、回復期の混乱の中で警察の取調べを受け、いつの間にかすえ子殺しの容疑で留置される。このような状況のもとで「私」は手紙を書いているのである。「私」はまず土田に「嘆願」(八五)し、「すがり」つくために、学生時代の「何にも比するもののない程濃かだった友情」を引き合いに出し、次のように熱っぽく語る。

われわれは親友でした。或いは親友以上のものだったではありませんか。……あなたは私より三つ上の兄さんです。其の兄さんが弟を求めたのです。若かった私は、いや寧ろ幼かったと謂っていい私は、あなたの強い性格に圧せられて、まもなくあなたの無二の弟となったのです。……私は淋しい私を、ほんとうに理解してくれる人がいたと思いました。その上あなたは私を愛してくれました。私はただ一人あなたを兄とも恋人とも感じたのです。あなたは私より一年上の級にい

ました。それ故学校の科目についても常にあなたは私を導いてくれました。あなたは其の上秀才でした。私はあなたを尊敬し、あなたの為す所悉く正しいとすら信ずるに至ったのです。(八五―八六)

この一節では高等学校の寮における男子学生間の結び付きに焦点が当てられている。「私」は土田を「親友」、「或いは親友以上のもの」と称し、「兄さん(兄)」、「恋人」と言い換える。「親友／兄／恋人」が一体となり、男性間の恋愛と友情は分断なく連続する。ここからは「男色」概念、とりわけ「衆道」のモデルに従って、学生時代の二人の絆が規定されていることが読み取れる。年長の土田が「念者」となり、「若衆」となった「私」を教え、導くのだ。なお、年齢差に基づいた男同士の絆は「衆道」と古代ギリシアの「ペデラスティ」に共通しており、しかも浜尾がカーペンターの著書を通じて古代ギリシアに通じていたことを考え合わせると、「ペデラスティ」の語彙を用いて、土田を「エラステース」、「私」を「バイディカ」と呼ぶことも可能だろう。「衆道」のモデルを持ち出すにせよ、「ペデラスティ」を援用するにせよ、年長者による年少者の教

育という側面からの男性同性愛の正当化は常套手段であった。⁽¹⁵⁾「ホモセクシュアリティの研究者」としての浜尾も「同性愛考」(一九三〇年)というエッセイで、「愛人間の知識程度が、常に、平衡し得るという点」から「同性間の恋」を擁護し、「Homosexuality」という事の社会的意義」を導き出している。⁽¹⁶⁾

『悪魔の弟子』に戻ろう。「私」と土田との称讃すべき兄弟関係は、ホモソーシャルな高等学校の寮を舞台に二年間続くのだが、土田の「移り気」(八六)のために終わってしまう。そうすると「私」は見方を変えて、次のように土田を断罪する。

成程われわれは一種の恋人同士だったでしょう。そうして私は其の恋人に捨てられたに違いありません。しかし捨てられてあなたから離れた私は、自身を見つめる事が出来たと同時に、あなた自身を全部見透してしまったのです。土田さん。一言でいいます。あなたはこの世に於て、最も危険な人間です。あなたは悪魔です。人の肉を食っただけではあきたらず、其の魂までも地獄に堕さねばやまぬ恐ろしい悪魔です。……私が

はじめてあなたに会った時、私は全くの、汚れぬ少年でした。あなたと別れた時、ああ、既に悪魔の弟子だったのです。(八七―八)

それまでは導かれる「若衆」の立場にいた「私」が今度は土田を分析しようとする。「親友/兄/恋人」と規定されていた土田は「悪魔」と呼び直され、「衆道」のモデルに基づいた理想的な師弟関係も反転し、穢れ/無垢という二項対立へとずれていく。「私」は土田による教育を「悪魔の哲学」(九十)と命名するのだが、教科書として探偵小説の他に「クラフトエビング」(八九)の著作が用いられているのは象徴的だ。クラフトエビングの『変態性慾心理』は日本の性欲学及び「変態性慾としての同性愛」概念の基礎となった書物であった。「私」はここで自己の犯罪性を土田に押し付けるために「変態性慾としての同性愛」概念を持ち出して、学生時代の彼との関係を解釈し直しているのである。「私」は、「あなたの変った恋愛の為にからだを犠牲にしたことはなお忍ぶとしますが、魂を売ったことを思うと口惜しくてたまらない」(八八)と続け、「肉を食った」、「からだを犠牲にした」などと肉體性を強調する。

「あなたの」という表現によって、「変った恋愛」が土田の内面へと向けられていることにも注意しよう。さらに、土田から伝授される「知識」は「毒蛇の毒」(九三)とも言い換えられ、男性同性愛の伝染性が喚起される。しかも「毒蛇の毒」は「悪魔の哲学」による「知識」だけではなく、殺人や死と関連の深い睡眠薬をも含む。というのも、「私」が土田と知り合ったのは「不眠症」(九一)に苦しむ眠られない夜においてであり、「不眠症」という点でも土田は「私」の先達であったからだ。彼が「私」に与えた薬物を通じて、男性間のエロティシズムは病理化し、犯罪化⁽¹⁹⁾し、小説の主題となる殺人の計画へと密接に結びつく。

ところで、土田との関係が終わった後、すえ子に恋した「私」は、土田を「悪魔」と名付けたのに対して、彼女を「救いの神」(九四)と位置付け、自己を「正常」な異性愛者の側に置いて、土田を「異常」のほうへ囲い込もうとする。ある場面では「私」は土田が「独身」(九八)であることを強調し、「正しいセクシュアリティ」からの逸脱を示唆する。また別の場面では「私」も強烈なミソジニーを内面化しているにもかかわらず、土田を「女嫌い」(一〇〇)と呼ぶ⁽²⁰⁾。その一方で「私」自身が「正しいセクシュア

リティ」から逸れていくと、再び「悪魔の弟子」として、「あなたによって時かれた種が、私の心の中でいよいよ成長しはじめた」(九七)と土田にすべての責任を転嫁しようとする。極めて自分勝手な「私」の解釈のもとで、土田は「私」に付き纏う「悪魔」になるのだ。しかし、睡眠薬とともに男性同性愛に不気味さが付与される眠られぬ夜の場面でも、「あの夜明け頃にはわれわれ二人は完全に美しき友情を以て結びつけられていた」(九一)と「私」は土田との絆を讚美することも忘れない。確かに「私」は学生時代の称讃すべき「衆道」の絆を一九二九年には既に普及していた「変態性欲としての同性愛」概念で解釈し直しているのだが、彼の読みかえは不十分であり、そこには常に「男色」概念が残存している。現に強烈なホモフォビアによって土田を非難した「私」は最後にまたしても「友情の名」(一二四)を引き合いに出し、土田の同情を乞う一言で手紙を結んでいる。「私」は一方では「男色」概念を用いて学生時代の土田との絆を正当化したうえで、彼に「嘆願し」(八五)、「すがり」つき、もう一方では「変態性欲としての同性愛」概念を持ち出して、ホモエロティシズムを犯罪化しつつ、土田一人に押し付け、彼を「恨み」、

「呪」うのである。書き手の浜尾は男性同性愛を定義する「変態性欲としての同性愛」概念と「男色」概念の矛盾を、語り手の「私」の不合理な試みのために、解決しないままで戦略的に利用しているのだ。それに対して、『悪魔の弟子』と同様に男性間のエロティシズムが二重に解釈されていながらも、その二重性が破綻を招いてしまうのが『孤島の鬼』である。続いて乱歩の小説を取り上げよう。

『孤島の鬼』と男性同性愛の表象の困難

『悪魔の弟子』が発表された一九二九年に、『新青年』の発行元である博文館は、当時最大の発行部数を誇っていた講談社の『キング』に対抗するため、『朝日』という総合的な娯楽雑誌を創刊する。江戸川乱歩は同誌の創刊号一九二九年一月号から翌年の二月号まで長編小説『孤島の鬼』を連載した。というのも、前年、『陰獣』が掲載された『新青年』が増刷を重ねたために流行作家としての乱歩に白羽の矢が立てられたのである。乱歩自身、その経緯を十分に把握しており、売れるもの、読者に受けるものを書かなければならないという使命感を抱いていた。⁽²¹⁾一九二三年に『二銭銅貨』でデビューして以来、日本の探偵小説の旗

手であった乱歩は男性同性愛の研究家としても知られている。『孤島の鬼』以前の彼の作品にも男性同性愛を喚起させる要素は散らばっており、たとえば『一寸法師』(一九二六—二七年)や『陰獣』(一九二八年)などでは、ホモエロティシズムは猟奇的な装置の一つとして用いられている。⁽²²⁾さて、出版社側の期待に違わず、『孤島の鬼』には読者を飽きさせない様々な仕掛けが組み込まれている。テクストは、主人公である養浦という青年が一人称の語り手となり、彼が経験した「世人が嘗て想像もしなかった様な……奇怪事」(一三)、乱歩が好んだ表現によれば「人外境」を書物にしたという体裁を取っている。「私」はこれまで小説の読み手であったが、書き手になったことはない。「物語の発端だけでも、私は二十回も、書いては破り書いては破りした」(一四)という念の入れようで、常に「読者」を意識し、自己を「世人」読者の代表と位置付けている。小説の前半は日本家屋を舞台とした密室殺人事件と逆に衆人環視の中で起こった殺人事件が主題となる「探偵小説」(一四)、後半は紀伊半島沖の孤島を舞台にして、人工的に双生児とされた「秀ちゃん」という少女が綴った奇妙な手記を手がかりに、「戦慄すべき大規模な邪悪」が暴かれて

いく「怪奇小説」、さらには孤島の地底に隠された財宝をめぐる「冒険小説」(二三三)の様相を呈している。そしてそこに小説の「本筋」(一四)とは一見無関係であるかのように、「私」の友人で、「肉体的にも精神的にも、最も高貴な感じの美青年」(一九)である諸戸道雄が、「私」に「可成真剣な同性の恋愛」を感じていたという男性同性愛の問題が絡んでくる。

連載第一回目で「私」は主要な登場人物を次々と紹介していくのだが、「恥かしい打聞け話」(三〇)という前置きが続いて、諸戸との馴れ初めが語られる。神田の下宿屋で二人が出会ったのは「私」が十七歳、諸戸が二十三歳の時であった。「私」は次のように述べる。

科学者諸戸道雄は、私に対して、実に数年の長い間、ある不可思議な恋情を抱いていた。そして、私はとうとうと、無論その様な恋情を理解することは出来なかったけれど、彼の学殖なり、一種天才的な言動なり、又異様な魅力を持つ容貌なりに、決して不快を感じてはいなかった。それ故彼の行為が、ある程度を越えない限りには、彼の好意を、単なる友人としての好意

を、受けるに吝でなかつたのである。(三〇)

「正常」な「世人」の側に身を置く「私」にとつて、諸戸の「同性の恋愛」は「不可思議な恋情」で、「理解する」とは出来な「い」。「変態性欲としての同性愛」概念に基づいて、「私」と諸戸との間に明確な境界線が引かれるのだ。一方、諸戸も「科学者」(回想の場面では「医学生」という設定も手伝って、「変態性欲としての同性愛」概念を内面化しており、自身の「恋情」を「浅間しい」(三三)と形容し、「私」に向かって「人種が違っている」、「異人種なのだ」と繰り返す。「人種」という隠喩は異性愛/同性愛の不変性を端的に示すものであった。諸戸は、性欲学系の雑誌『変態性欲』に寄せた手紙で、「私は此の雑誌を手にしだしてから……変態性欲者である事を自覚して参りました。私は同性愛者で、又女性的男子である事も明かに知って来ました」と自己を定義する同誌の読者とも共通した「変態性欲者」、「同性愛者」なのである。⁽²⁹⁾さらに物語が進むと、彼は自分の「倒錯的な愛情」(一九三)を養母からの性的虐待と関連付けて解釈するのだが、性科学や性欲学において、「変態性欲」の原因追求は不可欠の課題であ

り、多くの場合は遺伝や幼少期の家庭環境に求められた。⁽²⁴⁾
『孤島の鬼』は、『悪魔の弟子』以上に露骨な性欲学のステレオタイプに支えられている。

だが、引用した短い一節でも、「私」と諸戸との関係が決して「変態性欲としての同性愛」概念だけで規定されているわけではないことも一目瞭然である。「私」は「異様な魅力を持つ容貌」をも含めて、諸戸に好感を持っている。そこで「ある程度を越えない限り」、「単なる友人としての好意」などと条件が設定されるのだが、結果として「私」の語りは回りくどいものになってしまふ。⁽²⁵⁾「私」の記述をたどると、『悪魔の弟子』の高等学校の寮と同様に、「私」の学校でも「遊戯に近い感じでは、同じような事柄が行われていた」(三二)ため、諸戸の恋情も「ひどく不快な感じではなかった」。それどころか彼と手をつなぎ、肩を組み、「彼の指先が烈しい情熱を以って私の指をしめつけ」るのを、「無心を装って、併しやや胸をときめかしながら、彼のなすがままに委せ」ていた。彼らの友情は明らかにホモエロティックであり、「私」もそれを十分に自覚しているのだ。⁽²⁶⁾『孤島の鬼』でも学生時代の二人の絆は「男色」概念によって規定されていると言えるだろう。年長の諸戸

は「念者」となり、肉体的な接触だけでなく、惜しめない「精神的な庇護」(三二)をも「若衆」の「私」に与えた。また、乱歩自身も日本の「衆道」と古代ギリシアの「ペドラスティ」との類似点をたびたび指摘しているが、⁽²⁷⁾ここで諸戸を「エラステース」、「私」を「パイディカ」と呼ぶことができる。いずれにしても、『孤島の鬼』の回想場面では、男性間のエロティシズムは「同性愛者」や「変態性欲者」という特殊な人格のみに関わるのではなく、まさしく「私」が性器に限定されない触覚的なエロティシズムを重視しているように、「私」と諸戸の間に拡散する。少なくとも学生時代の「私」の側には同性間のエロティシズムを特定の個人に限定する「人種」概念は存在していないのである。

ところが、回想場面が終わり、小説の「本筋」に戻ると、「一人の男がもう一人の男を愛する余り、その男の恋人を奪おうとする。普通の人には想像も出来ない様な事柄である」(三五)と「普通の人」と「性来女嫌い」(三六)という諸戸との間に再び明確な境界線が引かれる。「私」は「世人」の側に立って、諸戸を「常軌で律することは出来ぬ」「変質者」(七五)、「異様」な研究に従事している「性

慾倒錯者」(二〇六)などと性欲学の語彙を援用して規定する。「彼は同性の愛の為に、その恋人を奪おうと企てた疑いさえあるではないか」(七五)と「変態性欲」を根拠に諸戸に殺人の嫌疑をかけ、読者にも「私」の疑いを共有するように仕向けるのだ。しかし、「世人」を代表する語り手の「私」は探偵としてはきわめて凡庸で、諸戸は殺人犯ではなく、「優れた探偵能力」(二〇六)を持つ協力者であることが早い段階で判明する。そうなると「私」はあたかも「少年探偵団」のように、諸戸との「探偵遊戯」(一三八)に耽り、次のように記す。

若い私達の心の片隅には、確かに秘密を喜び、冒険を楽しむ気持があったのだ。それに、諸戸と私との間柄は、単に友達という言葉では云い表わせない種類のものであった。諸戸は私に対して不思議な恋愛を感じていたし、私の方でも、無論その気持を本当には理解出来なかったけれど、頭丈では分っていた。そして、それが普通の場合の様に、ひどくいやな感じではなかった。彼と相対していると、彼か私かどちらかが、異性でもある様な、一種甘ったるい匂を感じた。

ひよっとすると、その匂が、私達二人の探偵事務を一種愉快にしたのかも知れないのである。(一三八—一九)

「私」の語りはまたしても回りくどくなる。「変態性欲としての同性愛」概念のもとで自己を「正常」な異性愛者と位置付けようとする「私」にとっては、諸戸の「恋愛」は「不思議な」ものに他ならず、依然として理解不可能である。だが一方で、「私」は「異常」な「性欲倒錯者」であるはずの諸戸との絆から「普通の場合」とは異なる「一種甘ったるい匂」をも享受している。男性間のエロティシズムは「私」と諸戸の友情を分断するのではなく、まるで接着剤のように機能して、二人の絆をより強固にするのだ。ここからも「衆道」のモデルが読み取れる。また、引用した一節では「甘ったるい匂」というホモエロティシズムが異性化によって定義されていることにも注目しよう。『孤島の鬼』には男性性による結合である「衆道」のモデルだけではなく、性差を越境する「かげま」のモデルも持ち込まれているのである。⁽²⁸⁾

以上のように、『孤島の鬼』の語り手の「私」は「変態性欲としての同性愛」概念を基盤としつつも、自己が味わ

うホモエロティズムに関して「男色」概念によって解釈しているのだが、これら二つの概念は孤島の地底で衝突してしまう。「義を結ぶ」(二〇二)という「男色」的な行為を模倣し、手に手をとって「岩屋島」へと入り込んだ二人は、諸戸の養父であり、一連の事件の首謀者であった丈五郎と対決し、彼を幽閉する。そして島に隠された財宝を探すために、孤島の地下へと潜入する。ところが逆に丈五郎の策略に陥って、彼らは地底の迷宮「八幡の藪知らず」(二七二)をさ迷うことになる。迫り来る海水の脅威と死と隣り合わせの極限状態が次のように描かれる。

諸戸は私の腹の所に手をまわして、しっかり抱いていて呉れた。真の闇で、二三寸しか隔っていない相手の顔も見えただけけれど、規則正しく強い呼吸が聞え、その暖かいいきが頬に当たった。水にしめった洋服を通して、彼のひきしまった筋肉が暖く私を抱擁しているのが感じられた。諸戸の体臭が、それは決していやな感じのものではなかったが、私の身近かに漂っていた。それらの凡てが、闇の中の私を力強くした。諸戸のお蔭で私は立っていることが出来た。若し彼がいなかったら私はとっくの昔に水におぼれてしまったかも知れないのだ。(一九〇—二)

「真の闇」の中で視覚の効力が減退するにつれて、聴覚、触覚、嗅覚の役割が増大する。導き手となった年長者の諸戸の「規則正しく強い呼吸」、「暖かいいき」、「ひきしまった筋肉」、「決していやな感じのものではなかった」「体臭」といった肉体的諸要素が、年少者の「私」に生命力を与え、それによって「私」は生き延びる。力の授受を根拠にして、「念者」と「若衆」との間の、もしくは「エラステース」と「パイディカ」との間の理想的な絆が追求されているのである。恐怖に襲われた「私」が諸戸の「身体をさぐって、擦り寄って行」(一九八)き、二人が頬を合わせる瞬間にテクストが孕むホモエロティズムは頂点に達する。

さて、諸戸が「闇の世界へ生れて来た二人切りの赤坊」(一九九)と述べているように、「探偵遊戯」を開始して以来、彼と「私」は二人だけの空間を構成しており、男性間のエロティズムは二人の間に拡散していた。しかし「私」が「秀ちゃん」という少女の名前を口にすると、そこに異性愛を前提とした「正しいセクシュアリティ」の規

範が呼び戻され、一方、絶望感に苛まれた諸戸は「念者」の役割を放棄し、「悪魔の子」(三〇三)にアイデンティファイして、「私」への欲望を露にする。そうなると「私」は再び「変態性欲」としての同性愛概念を持ち出して、強烈なホモフォビアのもとで諸戸を「異常」のほうへと囲い込もうとする。「私」自身が「諸戸と私との間柄は、単に友達という言葉では云い表わせない種類のものではあった」と「友達」からの逸脱を示唆していたにもかかわらず、「友達として」(三〇六)の「肉体の接触」と「恋愛」の対象としてのそれとの間の厳密な区分が試みられる。諸戸は闇の中で獲物を狙う「盲目蛇」(三〇七)へと変貌し、「闇と死と獣性の生地獄」(三〇八)が次のように描写される。

蛇はヌラヌラと私の身体に這い上って来た。私は、このえたいの知れぬけだものが諸戸なのかしらと疑った。それは最早や人間と云うよりも不気味な獣類でしかなかった。私は恐怖の為にうめいた。死の恐怖とは別の、だがそれよりも、もっともつといやな、何とも云えぬ恐ろしさであった。人間の心の奥底に隠れている、ゾツとする程不気味なものが今や私の前に、その海防

主みたいな、奇怪な姿を現わしているのだ。……火の様に燃えた頬が、私の恐怖に汗ばんだ頬の上に重なった。ハッハッと云う犬の様な呼吸、一種異様の体臭、そして、ヌメヌメと滑かな、熱い粘膜が、私の唇を探して、蛭の様に、顔中を這い廻った。(三〇八)

二人の間に浮遊していたホモエロティシズムは諸戸の「心の奥底」へと封じ込められ、先ほど「私」に力を与えたはずの諸戸の「規則正しく強い呼吸」は「ハッハッと云う犬の様な呼吸」に、「決していやな感じのものではなかった」「体臭」は「一種異様の体臭」に変わる。「筋肉」から「粘膜」へと諸戸の肉体は軟化し、彼の肉体的な要素のすべてが、触覚的、嗅覚的におぞましいものへと反転するのだ。同時に「ヌラヌラ」、「ヌメヌメ」という表現によって、読者の生理的な嫌悪感もかき立てられる。要するに、死よりも恐ろしい「生地獄」を味わわせる諸戸道雄が「孤島の鬼」になったのである。⁽²⁹⁾だが、「男色」概念によって諸戸との間で理想化されたホモエロティシズムを堪能していた「私」が、同じ連載第十三回で「変態性欲」としての同性愛概念を急に掲げて、諸戸の「異様」さや「不気味」さを強

調し、彼を「異常」のほうへ囲い込もうとしても、「私」の側の一貫性のなさをいっそう明確にしてしまうことにはかならない。

さらに奇妙なことに、これほどの「生地獄」を味わわされたにもかかわらず、地上に生還すると「私」は諸戸との関係をなおも続けようとする。「大団円」(三二六)へと至る道筋をたどろう。二人が「八幡の藪知らず」を抜け出すと、そこにちょうど刑事がやって来て、財宝を前に発狂した丈五郎は逮捕される。「私」は丈五郎の策略のために人工的に双生児とされた「秀ちゃん」をもう一方の「吉ちゃん」から分離し、「正常」になった彼女と結婚する。彼女は「私」の婚約者であり、殺害された木崎初代の妹の緑であったのだ。正当な後継者である緑を通じて「私」は「岩屋島」の財宝を受け継ぎ、それを元手に、丈五郎によって肉体を改造された人々のための病院を建設し、外科医として諸戸を迎え入れようとする。だが、「私」にとってきわめて都合のいいこの「大団円」に諸戸道雄の姿はない。彼は実の父母のもとを訪ねた際に、突然、発病し、「私」の名前を呼び続けて死んだというのだ。仇討ちや宝探しといった読者に受ける様々な仕掛けの背後から、「美青年」

同士の恋というもう一つの主題が顔を見せてテキストは締めくくられるのだが、いずれにしても、最後まで「変態性欲としての同性愛」概念と「男色」概念の間を揺れ動いている「私」は、小説が発表された時点で既に普及していた「変態性欲としての同性愛」概念に従うと、容易に「異常」な同性愛者と読み取られる不安定な位置にいる。そこで書き手の乱歩が「私」の危うさに与えた解決策が諸戸の死なのである。「吉ちゃん」を「秀ちゃん」から切り離して緑という女性に「正常化」したように、「男色」概念を喚起させる諸戸をテキストから葬り去ることで、「私」を「異常」な同性愛者へと引きずり込む要素を削除し、「正しいセクシュアリティ」の体現者に、すなわち「世人」とするのだ。諸戸の唐突な死で「私」は救われ、大衆誌『朝日』の創刊を飾る小説の語り手としての資格が辛うじて得られる。とはいえ、乱歩の裁定で語り手の「私」が翻弄されている男性同性愛の二重性のすべてが解消されるわけではない。「正常」な「世人」になるためには、同性愛者という「異常」なカテゴリーを作り出し、周縁化しなければならぬが、それだけでも不十分で、最終的には「異常」な同性愛者を抹消するしかないという暴力的な仕組みをかえっ

て浮き彫りにしてしまう。テキストは「世人」であることの虚構性を暴き出すのである。

本稿ではここまで「変態性欲としての同性愛」概念と「男色」概念の二重性を軸にして、『悪魔の弟子』と「孤島の鬼」における男性同性愛の表象を分析してきた。浜尾が男性同性愛の定義にまつわる矛盾を語り手の理不尽な試みのために戦略的に利用したのに対して、乱歩はまさしくそこに大衆小説としての破綻を見出した。一九三二年に平凡社から刊行された全集に収録された「探偵小説十年」でも、彼は次のように記している。

この小説には同性愛がある。同性愛なんて、ギリシャ、ローマの昔か元禄時代ならいざ知らず、現代では関心を持つ人は殆どないのだから、娯楽雑誌にそんなことを書くのは見当違いだと思っただけで、その時分岩田君と東西の同性愛の史実について語り合うことが多かったものだから、ついそれが影響したのかもしれない。だが探偵小説のこと故、この異様な恋愛を思う様を書く機会がなかった。それが筋を運ぶ上の邪魔物に

さえな⁽³⁰⁾った。

乱歩はこの一節でまず「ギリシャ、ローマ」の男性間の結び付きや「元禄時代」の「男色」と現代の同性愛との差異を確認し、「変態性欲としての同性愛」概念に従って、同性愛を「異様な恋愛」と規定したうえで、「娯楽雑誌」に掲載される「探偵小説」との不一致を述べている。ただしこれは浜尾と並んで、乱歩の男性同性愛研究の「師匠」であった民俗学者、「男色」研究家の岩田準一の「アカデミックな好み」に乱歩が触発されていたためであり、⁽³¹⁾実際には「エロ・グロ・ナンセンス」の高まりに乗じて、一九三〇年前後には「変態性欲」と「娯楽雑誌」は決して相容れないものではなかった。いずれにしても、乱歩は「思う様を書く機会がなかった」、「筋を運ぶ上の邪魔物にさえなった」と男性同性愛の表象の困難を吐露している。後年、『孤島の鬼』を「売文主義の皮切り」⁽³²⁾と評しているように、乱歩は一九三〇年以降、『キング』をはじめとする「娯楽雑誌」との結託をますます強めていくようになる。『孤島の鬼』以後の探偵小説では男性同性愛が取り上げられることはほとんどなくなった。⁽³³⁾だからと言って、乱歩が男性間

のエロティシズムの表象を放棄したというわけではない。あたかも男性同性愛とは無関係であるかのような素振りであり、しかし暗示的に「男色」概念を持ち出しながら、探偵と犯人との間、あるいは師弟関係といった男同志の絆に潜むホモエロティシズムが追求されるようになったのである。そしてその中心には乱歩が創造した偉大なるキャラクターである明智小五郎が君臨していた。⁽³⁴⁾

浜尾四郎の『悪魔の弟子』は創元推理文庫版(一九八五年)、江戸川乱歩の『孤島の鬼』は光文社文庫版(二〇〇三年)を用い、引用した頁数をそのまま記す。

(1) デイヴィッド・ハルプリンの議論を参考にした(『同性愛の百年間』ギリシア的愛について)(石塚浩司訳)法政大学出版局、一九九五年、八二頁)。

(2) 一九一三年に大日本文明協会が刊行した『変態性慾心理』は「一般読者」(二頁)を念頭に置いており、「変態性慾」という言葉の流行の契機となった(古川誠「セクシュアリティの変容」近代日本の同性愛をめぐる3つのコード』『日米女性ジャーナル』一九九四年、四六―七頁)。また、斎藤光はクラフト・エビングの「異常性欲」概念に揺れや発展があったと指摘する(斎藤光「クラフト・エ

ビングの『性的精神病質』とその内容の移入初期史』『京都精華大学紀要』一九九六年、一五四頁)。「変態性慾心理」では同性間のエロティシズムは「顛倒的性慾感覚」とも解釈されている。

(3) 竹村和子『愛について』アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店、二〇〇二年、三七―八頁)。

(4) 古川誠によれば、一九〇〇年代から二〇年代にかけて homosexuality の訳語として「同性交接」、「同性的色情」、「同性的情交」、「同性の愛」、「同性欲」、「同性間性欲」、「同性愛」、「同性恋愛症」、「同性相親症」などが考案された(古川、一九九四、四四頁)。これらは「性欲」系の語彙と「愛」系の語彙に大別できる。ここで時代背景に目を向けると、一九一一年に新瀉の親不知で起きた女学生同志の心中事件以来、女性間の性愛への社会的な関心が高まっていた。当然ながらそれは「男色」に属する語彙では説明できず、そのため homosexuality の訳語が求められたのである。そしていわゆる「家の中の女」である女子学生に適応させるべく、「性欲」系ではなく、「愛」系の語彙が選択された。したがって「同性愛」という語の成立には女性間のエロティシズムが大きな役割を果たしている。しかしいったん定着すると、「同性愛」は性欲学の文脈で男性化した。なお、本来、homosexuality は「性欲」系の語彙

であるため、日本語の「同性愛」との間にはずれが生じている。

(5) ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ 知への意志』(渡辺守章訳)新潮社、一九八六年、五六頁。

(6) たとえば、性欲学者の田中香涯が主幹した『変態性欲』では、田中の論考で提示された「変態性欲としての同性愛」概念を内面化した読者が同志に手紙を寄せ、誌面に掲載される。今度はその読者の手紙に共感した他の読者からの手紙が紹介される。このような書き手と読み手の、あるいは読み手同士の交流からは「同性愛者」というアイデンティティが浸透していく過程の一端がうかがえる。

(7) 梅原北明が編集した会員制の雑誌『変態・資料』(一九二六—二八年)や同じ梅原の『耽奇、探奇、談奇』と『グロテスク』を掲げた『グロテスク』(一九二八—三〇年)などが「変態性欲」をより扇情的に取り上げるようになった。秋田昌美によれば、一九三〇年頃には「エロ・グロ・ナンセンス」が頂点に達し、出版界は「犯罪猟奇ブーム」に沸いたという(『性の猟奇モダン…日本変態研究往来』青弓社、一九九四年、五二、五九、一四五頁)。また、『変態性欲』の娯楽としての消費は、古川、一九九四年、四九—五〇頁、Gregory Pflugfelder, *Cartographies of desire: male-male sexuality in Japanese discourse, 1600-*

1950, University of California Press, 1999, pp.287-90) 詳し。

(8) 井原西鶴『好色一代男』(二六八二年)小学館、一九九六年、二〇頁。

(9) 「野傾論」は『田夫物語』(寛永年間)や『色物語』(万治寛文頃)で展開されている。『田夫物語』(『日本古典文学全集 三七』小学館、一九七四年、二二—一四一頁)では、「若衆狂ひ」の「華奢者」と「傾城狂ひ」の「田夫者」はまず美的価値によって「若衆」と「傾城」の優劣を論じるが、最終的に後者が生殖を持ち出し、「若道」(衆道)を攻撃すると「華奢者」は反論の術を失う。一方、『色物語』(『仮名草子集成 四』東京堂出版、一九八三年、一七七—一九七頁)では、両者の議論の解決策としてある老人が「中庸」を説く。すなわち「二つの道」に「かたよら」ないことが重要とされるのだ。「野傾論」からは当時の規範的な「男色」のあり方が読み取れる。

(10) 井原西鶴『男色大鑑』(二六八七年)小学館、一九九六年、四三六頁。

(11) 氏家幹人『武士道とエロス』講談社現代新書、一九九五年、三〇頁。まったく例外がなかったわけではないが、年齢差に基づく能動/受動という固定的な役割分担が「衆道」の前提になっている。Pflugfelder, 1999, pp.69-73も

参照。

- (12) 古川、一九九四年、五〇―一頁。古川は日本では一九二〇年代に「同性愛の認識図式がほぼ完成し」たと述べる。「単に男色が変態性欲に置き換えられた」のではなく、両者が「重層的に重なり合って」、男性同性愛のイメージを構築したのである。また、イヴ・コゾフスキー・セジウィックの『クローゼットの認識論』によると、「変態性欲としての同性愛」概念と「男色」概念の二重性は、ホモエロティシズムを「主として、相対的に固定された、少数の明確なマイノリティに作用する問題だと定義する」「マイノリティ化の見解」と「様々なセクシュアリティの連合体全体の中で、様々な位置を占める人々の生活を長期にわたって決定して行く問題だと定義する」「普遍化の見解」との間の矛盾であると言える。審判を下そうとするのではなく、矛盾そのものを取り上げることの必要性を唱えるセジウィックの議論を参考にして、本稿でも男性同性愛を定義する二つの概念の二重性を分析していく。(『クローゼットの認識論』セクシュアリティの二〇世紀)(外岡尚美訳) 青土社、一九九九年、一〇、二二七頁。
- (13) 江戸川乱歩『探偵小説四十年 上』(江戸川乱歩全集 二〇) 講談社、一九七九年、三三四頁。
- (14) 江戸川乱歩「二人の師匠」『江戸川乱歩全集 二二』

講談社、一九七九年、五一頁。乱歩は「後には私の方が広く読みはじめ、詳しくなって、同君に帽子をぬがせたようなこともあった」(『探偵小説四十年 上』三三四頁)とも記している。

- (15) 『彼が殺したか』『日本探偵小説全集 五 浜尾四郎集』創元推理文庫、一九八五年、四四頁。

(16) 坪内逍遙の『当世書生気質』(一八八五―八六年)に登場する桐山弁六という書生は「女色に溺るゝよりハ龍陽に溺るゝほうがまだえいわい。第一互に智力を交換することも出来るしなア。且ハ将来の予望を語りあふて。アマビシヨン」「大志」を養成するといふ利益もあるから」(『明治の文学 四』筑摩書房、二〇〇二年、一四三頁)と知識の共有を理由に「龍陽」(男色)の価値を主張する。ただし、テキストでは桐山の説は否定される。一方、古代ギリシアの「ペデラスティ」を援用して男性同性愛を擁護するテキストとしてはアンドレ・ジッドの『コリドン』(決定稿一九二四年)が挙げられる。『コリドン』におけるジッドの戦略は、拙稿「健全なる男性同性愛のかげに」(『一橋論叢』二〇〇四年九月号、九九―一二七頁)を参照。

- (17) 浜尾四郎「同性愛考」『婦人サロン』一九三〇年九月号、一三九、一四一―二頁。また、その続編として同誌の同年一月号に掲載された「再び同性愛に就いて」では、

「同性愛の研究は決して医師のみに任せておくべきものではない。決して性慾学の範囲中のみ論議せられて居るべきではない。況んや近代のエロティックやグロテスク趣味にさそわれて之をジャーナリスチックにのみ興味づけるべきものではない。問題ははるかに真摯である」(六〇頁)と警鐘が鳴らされる。だが、浜尾が批判するのは性欲学の間がわしきであり、「変態性欲としての同性愛」概念が放棄されるわけではない。二つのエッセイでも参考文献としてクラフト＝エビングの著作が挙げられている。

(18) 「毒蛇の毒」という言い回しは、嘔む行為や体液を喚起させ、男性同性愛者と吸血鬼、さらには死を重ね合わせる(キース・ヴィンセント、風間孝、河口和也著『ゲイ・スタディーズ』青土社、一九九七年、二二八—三〇頁)。

(19) 一九三〇年前後には「変態性欲」研究と犯罪研究は実際に接近する傾向にあった。たとえば、武俠社が「学術と猟奇趣味の握手」(秋田、一九九四年、一四六頁)を宣言して創刊した雑誌『犯罪科学』(一九三〇—三二年)では、必ずしも常に犯罪化されていたわけではないが、同性愛がしばしば取り上げられた。

(20) もちろん男性同性愛と女性嫌悪は常に結び付くわけではない。だが、「男色」概念のもとでは、「男色」を嗜好する者は「若衆狂ひ」などと同時に「女嫌ひ」と称された。

(21) 江戸川乱歩「探偵小説十年」(一九三二年)「孤島の鬼」(『江戸川乱歩全集 四』光文社文庫、二〇〇三年、三三一—三二頁)。

(22) 『陰獣』(『江戸川乱歩全集 三』講談社、一九七八年、二五七頁。また、『一寸法師』の冒頭部分(同上、一〇〇—一三頁)では、夜の浅草公園を舞台に「一種異様の人種」と規定される男性同性愛者の漁色(ハント)が描かれ、猟奇的な殺人事件の前奏となっている。「人種」という表現からは「変態性欲としての同性愛」概念も読み取れる。

(23) 『変態性欲』一九二三年五月号(二三八頁)掲載の「神戸YK生」の記述。

(24) 古川、一九九四年、四七—八頁、Pflugfelder, 1999, p. 268. 同性愛を家庭環境や遺伝と結び付ける見解は当事者にも内面化されやすいものであった。『変態性欲』一九二二年九月号で「男子同性愛の一実例」と紹介される手紙の書き手も「自分は女ばかりの姉妹中の一人息子です。そのため細胞が常の男子とは組織が違って居るのかも知れませんが」(二四二頁)と自己分析を試みている。

(25) 高原英理は、この一節を引用して、「私」は既にあと一步で諸戸と等しく『異常』とされてしまう危うい地点に位置しており、「自分の『正常さ』を確認し、『異常』は外にあると告げるため」に「ひどく言い訳がましい語り

方」をする」と指摘している。『無垢の力…〈少年〉表象文學論』講談社、二〇〇三年、一〇五頁。

(26) 乱歩が一九二六年に発表した隨筆『乱歩打明け話』

(『江戸川乱歩全集 二二』一四—一九頁)におけるホモエロティシズムの表象とも共通点を見ている。これらのテキストで乱歩は性器接触的な行為のみを性行為と見なす近代のセクシュアリティの規範を逆手にとって、あたかも性的なものとは無縁であるかのような素振りを見ながら、同性間の触觉的なエロティシズムを追求しているのである。

(27) 「J・A・シモンズのひそかなる情熱」(一九三三年)

『江戸川乱歩全集 一七』講談社、一九七九年、九一頁。
「もくず塚」(一九三六年)同上、五五頁。

(28) 回想場面でも諸戸に対峙した「私」は女性化する(三二—三三)。そもそも「私」は「かげま」的な美によって規定されており、「少年のおもかげ」(三五)を失わない「なめらかな頬」や「婦女子の如く艶か」な「筋肉」といった彼の容姿はテキストで大きな力を持つ。諸戸だけではなく、「独り者」(五八)だが、「女嫌い」ではない探偵の深山木幸吉までも「私の容貌に一種の興味を持つ様に思われた」と解釈される。「私」の両性具有的な美を中心としてもホモエロティシズムはテキストに拡散する。

(29) 「孤島の鬼」とは「岩屋島」に君臨し、「鬼のユートピ

ア」(三〇三)の創造を目論む丈五郎を指すのだが、諸戸道雄も「孤島の鬼」となることで、それまで単なる脱線のように「本筋」の周辺を取り囲んでいた男性同性愛の問題が「本筋」に合流する。

(30) 江戸川乱歩『探偵小説十年』三三三頁。

(31) 江戸川乱歩『同性愛文學史——岩田準一君との思い出——』二人の師匠』江戸川乱歩全集 二二』四四—四五頁。

(32) 江戸川乱歩『探偵小説四十年 上』一九九頁。

(33) 『猟奇の果』(一九三〇年)には「浅草ウルニング」への短い言及がある。『江戸川乱歩全集 四』、光文社文庫、四二七—二二頁。

(34) 探偵と犯人の間のホモエロティシズムの例としては『暗黒星』(一九三九年)が、師弟関係に関しては「少年探偵団」もの(一九三六年—二二年)が挙げられる。一方、『孤島の鬼』以後の乱歩は『娯楽雑誌』とは一線を画して、男性同性愛についての論考を執筆する。一九三三年には大槻憲二が主催した「精神分析研究会」の機関誌『精神分析』に「J・A・シモンズのひそかなる情熱」を発表する。乱歩が同会に出席するようになったのは、「精神分析には同性愛が非常に大きな題目として取扱われていたから」であり、「会員の中にも同性愛愛研究に興味を持っている人が

(75) 「男色」と「変態性欲」の間

二三ならずいたから」(『探偵小説四十年 上』二八二頁)
であったという。

二〇〇五年 五月九日受稿
二〇〇五年 五月三〇日レフエリの審査
をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)